

Title	〈特別エッセイ〉IV. 玉井教授のご友人の方々より
Author(s)	
Citation	Osaka Literary Review. 2010, 48, p. 140-171
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25342
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

IV

(玉井教授のご友人の方々より)

ふたつの肖像

一玉井 暲教授退官記念に寄せて 一

正木建治

今は、英文科に逆風が吹きつけていることは英文学から疎遠になった私にも感じられる。玉井 暲さんと私が大学院で学んでいた 1960 年代終わりから 70 年代にかけては英文学隆盛の時代で、『英語青年』休刊に象徴される今日の英文学衰退の状況を誰が予想しえただろうか。村上至孝・山川鴻三両教授の時代はおそらく研究と教育の世界に没頭していて大過なく過ごせた幸せな時代だったと思う。両教授の後を継がれた藤井治彦教授は、英文学界の屋台の揺らぎを、英文科の衰退や伝統的なアカデミズムの限界をすでに感知されていたはずだ。

この困難な状況に正面から対峙する役割を引き受けたのが玉井 暲さんだった。村上・山川・藤井の三代の英文科教授の言動に助手や同僚として付き添い、見守りながら、玉井さんはひそかに、旧態依然のアカデミズムの限界を見抜いていたのではないか。英文科が逆風に抗して生き抜くために、時代にふさわしい英文学教育を実践し、英文科の堅牢な土台を構築する必要性を切実に感じていたのではないか。だから、伝統的なアカデミズムの世界に安住することなく、教育現場や学会のしがらみの飛沫に身を晒して行動する、新しいタイプの阪大英文科の教授像を玉井さんは選択せざるをえなかった。そして選択できる力量も備わっていた。

この選択からは英文科の先達の誰もがなしえなかった、現実の成果が生ま

れている。阪大英文学会叢書の刊行、阪大英文学会大会のシンポジウムの斬新なテーマ、大阪大学英文学会ニューズレターの発行などは、英文学会の組織をより緊密にし、現下の逆風の状況への強固な砦となって、現場で悩み苦しむ会員を慰め、勇気づけている。

英文学教育に関していえば、たんに作品を読ませるのではなく、現在の代表的な文学理論のテキストを編纂し授業で読ませることで、作品の読みを意識化させる試みは日本英文学会でも注目された、独創的な着眼であった。それに関西英文学会を立ち上げたとき、玉井さんのオルガナイザーとしての面目が躍如としていただろう。

残念ながら、玉井 暲さんの行動の成果は今の私にはこのように断片的に しか語ることができない。英文学界の現実にコミットする玉井 暲さんはい わば公人であるが、それとは別の、近しい玉井さんの肖像をそろそろ描きた い気分になってきた。

私が遅ればせながら大阪大学大学院英文研究科に入った 1969 年に、学部から進学してきた玉井 暲さんと出会った。玉井さんがオスカー・ワイルドを研究対象にし、私はマシュウー・アーノルドに興味を抱いていた。年齢は一回りほど私のほうが食っていたが、お互いに遠慮なく、ヴィクトリア時代の分岐点を特徴づける二人の作家を軸によく議論し、知的に刺激を与えあっていた記憶がある。

玉井さんはワイルドを出発点とし、アーサー・シモンズ、ウォルター・ペイターといった世紀末の文人を経てやがてアーノルドへと時間軸を過去へ溯っていく。私は全く対照的に、アーノルドから出発し、ペイターからワイルドへとヴィクトリア時代中葉から世紀末へと下っていった。両者の関心の時間の軌跡は逆方向を描いてはいるものの、お互いの関心のダイナミズムは驚くほど重なっている。私の関心はもっぱら玉井さんに誘発され影響されたものだ。彼の語り論じるワイルドや世紀末の審美主義思想に触れなければ、多分私はペイターやワイルドに開眼(?)することはなかっただろう。

われわれが研究者の道を歩み始めた頃は、大学紛争が席巻し、三島由紀夫の自決があり、と60年安保から始まった政治の季節の渦中にあった。60年代後半から70年代にかけての時代をヴィクトリア時代中葉から世紀末にいたる風景と重ね合わせる、そんな時代感覚あるいは危機意識を共有していたともいえる。そして、この時代感覚がわれわれをシモンズの『文学における象徴主義運動』へと誘った。

さまざまな因縁があったが、玉井 暲さんと私は大阪府立大学に共に籍をおいた時期がある。岩野泡鳴訳『表象派の文学運動』や府大の英語教室の書庫で眠っていた、1908 年版の原書をすでに読み、シモンズの論文を発表していた玉井さんから、シモンズの魅力を教えられた。現実から隔絶した人間の内面の現実を見事に視覚化する文体でフランス象徴主義の作家を論じた、この作品に私も魅了された。シモンズを話題にしている間に、The Symbolist Movement in Literature を泡鳴訳のような直訳調の翻訳とは異なる、少なくとも明晰な文体で共訳しようということになった。われわれの意気込みは、アーサー・シモンズ『文学における象徴主義運動』として結実し、府立大学英語教室の研究誌『英米文学』(23 号 1976 年、24 号 1977 年)に発表された。結局この試みは、ふたりが府大から離れたために約半分を訳した段階で頓挫した。『英語青年』誌上で荒川龍彦氏が執筆された書評文のなかでこの共同訳にも言及され、ぜひ完訳するようにと励まされたことは嬉しい思い出である。まったく予想もしないところで読まれていたことが嬉しかったのだ。

シモンズを介しての玉井さんとの交遊はまだ先があった。玉井さんが和歌山大学に、私が神戸商科大学に在籍していたときに、シモンズの『象徴主義運動』の教科書版(大阪教育図書、1980)を編む機会に恵まれた。翻訳が挫折してわだかまりがあったから、この教科書にはふたりとも情熱を注いだ。本文 92 ページ、注釈 73 ページで、翻訳の時と同じぐらいにテクストを読み込み、テクストの背景となる事実関係を可能な限り実証し、議論を重ねた。これこそ文字通り教科書の労作だとわれわれは自負している。この教科書は

前川祐一訳『象徴主義の文学運動』(富山房百科文庫、1993)の「あとがき」で謝辞を頂いた。この教科書をめぐる一つのエピソードを紹介しておこう。 玉井さんが和歌山大の経済学部でこれを使ったところ、授業終了後、一人の学生がやってきて、どうしてこんな教科書を…と拳で教卓を叩いたそうである。そのとき玉井先生はどんな表情をしたのか。私は狡猾にも、出版社に申し訳ないけれども、献本は何度か請求したのに、一冊も教室では使ったことがない。

教科書版の「はしがき」は、ふたりの名前が記されているが、玉井さんが 単独で執筆したものだ。玉井さんの論文の文体は緻密で端正な構えを崩すこ とは滅多にないが、「はしがき」は熱気と冷静な批評眼が拮抗した、私の好 きな文章のひとつなので引用したい。

この詩人論集は一種の危機意識に貫かれている。それは … 文学存立の基本条件を根源的に問い直し、「合理」「物質」「科学」の文学に代わる新しい文学を模索するシモンズの姿と言えよう。……

シモンズのこの一種の気負いは、取り上げた詩人の特質を高く評価してその普遍性、重要性を強調するのとは裏腹に、彼の個人的気質の侵入を許してしまう。ここに、彼の批評の魅力と限界が共存していると言ってよいであろう。

小文ながら、シモンズの本質を完膚なきまでに言い切っている。『象徴主義 運動』をめぐる、玉井 暲さんとの共同作業は青春時代の思い出のように忘 れ難く懐かしい、と今も私は青臭く感じている。玉井さん、いつかまたシモ ンズの話をしましよう。待ってます。

(大阪府立〔女子〕大学名誉教授)

玉井さんについて

三浦良邦

月日が経つのは早いもので、私が昭和 44 年 4 月、大阪大学大学院文学研究科に入学し、玉井暲さんに出会ってから早くも 41 年が経とうとしている。その当時、英文学には村上至孝先生、山川鴻三先生、英語学には毛利可信先生、成田義光先生がおられた。英文学を専攻したのは、玉井さんのほかに、正木建冶さん、林和仁さんと私であり、英語学には島田守さん、加藤主税さんがおられた。

当時のことは 40 年以上前であり、かなり記憶があいまいであるが、確か John Keats や Percy Bysshe Shelley の英詩講読があり、語彙の出典を OED に求め、朝早くから文学部英文の資料室に顔を出したのを覚えている。また、Northrop Fyre の Anatomy of Criticism を 4 人で輪読したのを覚えている。

ただ今でも残念に思うことは、私は奈良教育大学卒業後すぐに奈良県の定時制高等学校の教諭になり、大学院入学後もやめないで続けていたことである。奈良の田舎から朝早く大阪に出かけ、夜遅く仕事から帰る毎日で、結局十分に英文学の研究に没頭することができなかった。また、交遊でも、金曜日に英文学談話会があり、授業後も引き続いて喫茶店などで英文学の話がなされたが、ほとんど参加できなかった。折角、英文学を研究する機会を得ながら、中途半端になってしまったのは残念であった。英文学に情熱を持って真摯に取り組んでおられる玉井さんの姿を見るにつれ、この感は深いものがある。

私は現在近畿大学で英語を教えているが、今日の私があるのは、大阪大学 大学院で修士課程を修了したからであり、先生方、皆さん方のおかげである と感謝している。 玉井さんは温厚で誠実な人柄であり、それに加えてリーダーとしての信念と実行力に富んでおられる。それが最もよい形で結実したのが、日本英文学会関西支部の設立であると思われる。関西支部の設立は画期的な出来事であり、関西の英文学関係者が身近で発表できるようになり、関西の英文学会の発展に多大の貢献が期待される。

玉井さんとは永いお付き合いであるが、ほとんど私が一方的にお世話になるばかりで、同級生は有難いものであるとしみじみ感じている。私は大学では George Orwell を研究したが、修士では Aldous Huxley を選び、勤めてもいたので、準備に時間がかかり、修士論文を書くのに3年かかった。私が修士3年目には、玉井さんはすでに修了され、文学部英文学の助手をしておられ、色々アドバイスをしていただき有難かった。個人的にも、私の結婚披露宴に出席していただき、私も玉井さんの結婚披露宴に和歌山の御坊に招待していただいた。また、玉井さんの博士号修得の際にも、読書会のメンバーなどと共にお祝いの席に出席させていただいた。

一緒に仕事をさせていただく機会は少なかったが、その少ない中で私にとって一番感慨深いのは、翻訳『小説と反復、7つのイギリス小説』(J・ヒリス・ミラー著、英宝社、1991)の出版であった。私は、大阪大学の言語文化部長をしておられた齋藤俊雄先生が奈良教育大学におられた当時、そこの学生であり指導を受けたご縁で、大阪大学の言語文化部で何年か英語の非常勤講師をさせていただき、そのおかげで玉井さんとの交遊が深まり、玉井さんが何人かの先生としておられた批評書の読書会に私も参加させていただくことになった。その時読んでおられたのが、J. Hillis Miller の Fiction and Repetition; Seven English Novels (Harvard University Press, 1982) であった。

玉井さんのはしがきを反復するが、J・ヒリス・ミラーは、ディコンストラクション派の批評家として、1970年代、80年代のアメリカ英文学界をリードした批評家の1人であり、『小説と反復』は小説の非均一性、異質性を解明するものとして、小説の機能の1つである反復に着目し、多様な反復の形

態を19世紀、20世紀の小説に探求した批評書である。

英文学からは逸脱するが、この翻訳で私の印象に残っている考えは、「もし批評家が1つの解釈を提示するならば、彼はテクストのあるデータを使用して他のデータを除外していることになるだろう。その他の材料は彼が小説について述べたことと矛盾するかもしれない。別の批評家は異なったデータを使用し,最初の批評家が使ったものを無視して,別の形を考えるだろう」である。これは現実社会で日常的に見られることであるが、自身の議論の正当性を強化するために、他の例を持ち出すが、しかし、これらの意見は総合的に判断すれば、また別の観点から議論すれば、必ずしも正しくなかったり、別の結論がでてくる場合が多いようである。

読書会には数年参加させていただき、玉井さんはじめ、メンバーの方々と 交遊する機会があり楽しかった。

最後になりましたが、今後ともよろしくお付き合いをお願いいたします。 (近畿大学教授)

玉井さん、ご苦労様でした

島 田 守

OLR 48 号編集委員会から、突然、玉井暲教授退職記念号エッセイの執筆 依頼の連絡を受け、「玉井さんも来年3月で定年を迎えられることになるのか」と、月日の経つのの速さに驚いています。玉井さんの修士時代と助手時代を知る一人としてその頃の思い出を語ることにします。

私が大阪大学大学院文学研究科修士課程(英語学専攻)に入学したのは、昭和44年(1969年)4月のことでしたが、ちょうど同じ時に玉井さんも修士課程(英文学専攻)に入学されました。その年に修士課程に入学したのは、

英文学が4名で、英語学が2名であったと思います。当時の英文学講座のスタッフは村上至孝教授、山川鴻三助教授、高橋弥生助手、また、英語学講座のスタッフは、毛利可信教授、成田義光助教授、稲木昭子助手でした。院生は少なく、二つの講座をあわせても十数人ほどで、教わる側からすると実に恵まれた教育環境であったと思います。しかしながら、その年は大学紛争のあおりで大学は封鎖されており、正規の授業は望むべくもなく、4月中旬過ぎに中之島図書館分館会議室で「阪大英文学会別会」という名目でオリエンテーションを兼ねた研究発表会が行われただけでした。11月近くになってやっと最低限の科目の授業が集中講義的に行われたように記憶しています。1年次はそんな非常事態で開講科目も少なかったこともあって、一部の授業は専攻には関係なく受けざるを得なかったことは、むしろ、興味深い体験でした。村上先生の英詩演習の時に、玉井さんが熱心に議論に参加され授業に大いに貢献されていた様子や、毛利先生の英語学演習の時に活発に質問されていた様子が思い出されます。

昭和 46 年 (1971 年) 4 月に、玉井さんは英文学講座の助手となられ、私は英語学講座の助手となりました。パソコンはもちろんのこと、コピー機も感熱紙式のものしかなかった時代でしたので、助手の仕事は電動の英文タイプライターと手書きでするものが多くて時間もかかりました。阪大英文学会は会員数も少なく、また、英米文学と英語学の棲み分けも今日ほど鮮明ではなく、どこか同窓会的な雰囲気が残っていたような感がありました。総じて言えば、時がゆったりと流れ、物事をじっくり考えて行動できる余裕を持てた時代であったように思われます。

助手時代で記憶に残るものの1つとして、和具にある阪大の「海の家」で2泊3日の合宿を始めたことがあります。熱心な4回生がいて実現したわけですが、成田先生を団長に、玉井さんと私が付き添いで3・4回生を引率するというものでした。学部生が中心でしたが、院生や卒業生も参加してくれました。村上先生が参加してくれたこともありました。昼間は釣り、水泳、

卓球、夜はコンパと遊びの部分が多かったのですが、明け方まで学問や青春について語り合う者もいたようでした。学部生にとっては、院生ら先輩たちから卒論などに関するアドバイスを貰い、思わぬ収穫があったようでした。今にして思えば、人生上でも学問上でも、先輩が後輩を指導するというシステムがうまく機能していた古き良き時代であったのかも知れません。ちなみに、玉井さんは泳ぎが達者で、島の周りを泳いで一周されたこともありました。私の経験からすると「櫓は3年、櫂は8年」と言われるほど難しいはずなのに、玉井さんは櫓のこぎ方をすぐにマスターされました。

玉井さんは助手時代を終え和歌山大に移りましたが、1983年に阪大文学部に助教授として帰って来られました。その後27年もの長きに渡り、英文学を講じられ、数多くの後継者を育成されたこと、また、英米文学・英語学研究室や阪大英文学会の発展のためにご尽力されたこと、さらに、2005年には、日本英文学会関西支部を立ち上げられ、支部長に就任されたこと等々は皆さん方がご存知のとおりです。

玉井さんが退職されても、玉井さんが築いてこられた阪大英文学の伝統は きっと受け継がれることでしょう。

最後に、玉井さんのこれまでのご尽力に感謝し、ご功績に敬意を表すとと もに、今後のご健康とますますのご活躍を念じております。

(龍谷大学名誉教授)

玉井君にまつわる思い出

加藤主税

僕は玉井君の同期生「メッチャ若い院生」

僕は昭和44(1969)年4月に修士課程(英語学)に入学しました。英語

学は島田さんと僕のふたりだけで、M2も Dもすべて皆さん修了していました。その年英語学講座は初めてスタッフが全員揃ったのに、(毛利教授、成田助教授、稲木助手)院生2人だけの寂しい授業が始まりました。しかも、翌年は学園紛争のためもあって、入学者は皆無で、さらにその後1名ということが2、3年続きました。つまり英語学の後輩も少ないということです。一方、英文学(M1)は玉井君他、林君、正木さん、三浦さんの4名で、M2も Dも数名在籍しておられ、にぎやかで、うらやましかったですね。英文 M1の6名のうち、林君は途中で留学され、同年齢は玉井君と僕だけだったし、アパートが近かったので、特に懇意にしてもらいました。そして何といっても、ふたりとも童顔で貫禄がなかったので(失礼)、学内を歩いていると、学部1年生に間違われました。「メッチャ若い院生」でしたね。

学園紛争のため自宅待機

4月に授業が始まりましたが、その5月には学園紛争のため大学閉鎖になり、正常な授業ができなくなりました、中之島の旧理学部とか、別の場所で授業をした覚えがあります。授業をやっていると、全学連が押し入って来るのです。ホント恐かったですね。機動隊が駐留し、学内に入るにも、学生証が必要でした。僕のアパート(待兼山荘)は教養棟の裏の竹やぶの北側にあって、校門の後の道を通って行きますが、そこを通るにも学生証が要るんです。そういえば、その竹やぶの中に闘争用の火炎瓶が隠されていて、僕も機動隊に調べられました。

自宅待機はその年ずっと続きました。全員留年という噂が広がり、覚悟していました。さらに辛いのは奨学金が止められたことです。バイトを増やしました。その期間、色々な場所で院生の自主的な勉強会は時々していました。授業が再開されたのは、翌年(昭和45年)1月の初めでした。

僕はプロの占い師

僕はその間、愛知県の実家に帰ったりして、占い師をしていました。ここだけの話ですが、実は僕は学部学生の時から、プロの占い師をしていました。

それで同じアパートの後輩、経済学部、法学部、人間科学部の学生が多かったですが、を集めて、阪大手相研究会を結成し、初代会長になりました。後輩に占いを教え、関西の女子大、短大をまわり、大学祭で占いコーナーをして、相当もうけましたよ。

その後、関西学院大学、同志社大学、神戸女学院大学などの占いサークルに呼びかけ、関西学生易学連盟を組織し、初代連盟長にもなりました。その後連盟は解散しましたが、手相研は続いているようです。今は占いは営業ではやっていませんが、占い教室を主宰しています。マスコミでは占い評論家として、コメントしたり、出演しています。テレビやラジオでレギュラー番組も持っていました。椙山女学園大学で易学研究会を結成し、部員 200 名という日本でも有数なクラブに発展しています。余談ですが、文化センターでマジック講座を持っているので、マジック研究会の顧問として、学生を指導し、各イベントでマジック公演をしています。

変則的圧縮授業

1月からの授業はすざましいものでした。変則的圧縮授業(1時限3時間)が毎日6頃まで続きました。毎日授業が終わると、先生も学生も疲れきって、皆で喫茶店に行き、励まし合いました。1月から4月までの3ヶ月間で1年分の授業をして、規程単位とらなければなりません。開講科目が少なくて選択の余地がなく、英語学も英文学もすべて受講した記憶があります。5月進級です。すぐ5月から、修論に取りかからなければなりません。1年遅らせようかと思いましたが、玉井君と相談して、何とか書きました。

学会デビュー

変則的に、修論の発表会が第2回阪大英文学会で行われました。玉井君と 僕にとっては初めての学会発表でした。僕の発表に関しては修論指導の先生 から、何も批評はありませんでしたが、玉井君の場合、指導教官の先生から、 発表に関して厳しいコメントがあり、僕はびっくりしました。先生の指導を 十分受けて発表したはずなのに、本番で批評するなんて、理不尽だと思いま した。後になって、それが、その先生の玉井君への深い愛情ということがわかりました。

M 修了後、玉井君が英文学、島田さんが英語学の助手、僕が D の院生として残り、他の同級生は他大学に就職しました。本当の学会デビューは、その翌年(昭和 47 年)の日本英文学会中部地区大会です。玉井君と僕と二人で、三重県まで行った覚えがあります。

いつもニコニコ玉井君

学部生を含む英文科の皆さんとは、色々思い出があります。和具での合宿とか、京都嵐山とか、色々なところでの飲み会とか。Dになると、後輩とのつながりができました。アパートが近かったので、4学年下の、仙葉君、松阪君などと玉井君を含めて、石橋界隈をよく飲み歩きました。あるいは各地で学会があると、集まって、飲み会をしました。キャンパスの池辺で缶ビールを飲みながらごろごろしていました。少々酒グセの悪い後輩が何を言っても、玉井君はいつもニコニコと聞いていて、温厚で、人格者でした。不機嫌な顔や怒った顔を見た事はありません。

和歌山の実家に泊まった?

玉井君の結婚式の後、和歌山の玉井君の実家に泊まった覚えがありますが、確かではありません。松阪君も実家が和歌山で彼のお父さんとたらふく飲んで、泊まったのは確かに覚えていますが。今度玉井君に聞いてみようと思います。堺の家に泊まったのは、確実に覚えています。その時、奥さんがいたのかどうかは、記憶があいまいです。ちょうどその頃結婚されたと思います。そういえば、玉井君から、恋愛、女性の話は聞いたことありませんね。この文を書いていたら、玉井君に会って確かめたいこと、たくさん出てきました。

僕のこと

博士課程を出た後、僕は愛知県の地元の家から最も近い(車で10分位) 大学(愛知工業大学)に就職しました。その後12年勤めてから、ちょっと 遠くなりましたが(5分位)、椙山女学園大学の新設学部に最年少教授(40 歳)として、誘われました。待遇も環境もよく快適でした。

日本で唯一の占い師で大学教授ということで、マスコミに登場。さらに「死語」に「現代語で古くさい語」という定義を定着させ、死語ブームの一端を担いました。その後「若者言葉」関係の本を数冊出し、若者言葉評論家になり、さらに運命学を大学正式科目として、日本で初めて開講し話題になりました。最近では僕の造語「ケーチュー」(携帯電話中毒、依存症)が新語辞典に載りました。最新の著書は『女子大生のココロに残った言葉』で56冊目の著書です。現在『若者が使える四文字熟語会話集』、『カタカナ語亡国論 困った外来語たち』、『女子大生が好きな死語、武士語会話集』、『ちから教授の一生ものの手相術』、『日本初ちから教授のボデパ占い』を執筆中。

(椙山女学園大学教授)

玉井 暲 氏との思い出

坂 本 武

1971(昭和46)年4月、私は九州大学大学院修士課程の2年間を終えて、阪大大学院の博士課程に入ることになった。18世紀の英国作家ローレンス・スターンについて修士論文を書いた私は、スターンとスモレットについての著書のあった村上至孝先生の指導を求めて大阪へ出てきたのである。進学が決まって奨学金の申請をした時、書類などを阪大の英文研究室から送ってもらったと記憶する。その時の世話をしてくれたのが、助手をしておられた玉井氏だったろう。私の大阪時代の始めを彩る師・友人たちの一人であった。村上先生の演習や談話会では必ず氏の姿があった。しかしそういう場で氏の意見を肉声で聞いたという記憶はない。村上先生の演習で読んだ一つは、ポープの『愚物列伝』だったが、われわれが四苦八苦しながら読解を進めて、時

には誤読が明らかになった時も、氏はただ沈黙を守っておられたように思う。 氏は寡黙の人だった。しかし、じつは気さくで快活な精神の持ち主である ことをやがて知ることになった。日常の経験からもそうだったが、伊勢の英 虞湾に面した和具の海の家での合宿に行った時も氏の面倒見の良さに強い印 象を得た。以来その印象は変わっていない。

阪大英文科の雰囲気はまことに自由だった。村上先生もそうであったが、助教授の山川鴻三先生もまことに穏やかな温顔をたたえた先生で、われわれは両先生のもとでのびのびと議論し、勝手に読書会などを作り、夏休みに長野県白馬村で合宿なども行ったりした。この自由さは、私には格別のものだった。というのも、その前の九大の時代は、いわゆる 70 年安保闘争の激しい時で、2 年間の修士課程のうち半分は大学紛争の中で授業も開かれなかったし、指導教授の前川俊一先生はゲバルト学生から暴行を受けられるという事件も起こった。われわれも闘争派の学生たちから、己の学問の意味を根本から問われるという立場に立たされた。よど号のハイジャック事件が起こったのもこの時期で、私はラジオでその実況中継を聴きながら、下宿の窓からその飛行機が飛んでゆくのを見ていた。九大のキャンパスは、福岡空港から飛行機が離陸するときの丁度真下にあたっていたからである。通常の演習に戻った時も、飛行機が通過するときは先生の声が騒音のうちに消え、われわれは顔を見合わせるしかないのだった。

大学紛争は全国の大学に広がっていた騒乱であったから、阪大でもそうした事件は多々あったに違いない。しかし、私が来た頃には紛争は終息期に入っていたのであろうか。ともかくあの3年間は、大げさにいえば英文学に改めて入門し直すという気持ちで過ごした。私の同期には、安藤幸江さん、岡村祥子さんがいる。その前後には、竹ノ内明子さん、長谷恒雄氏、仙葉豊氏、正木建治氏、早々と故人となってしまった林和仁氏、小林恵子さん、富田成子さん、川口能久氏など、まことに多士済済である。

私は、その後関西大学に就職した。玉井氏とは毎年の阪大英文学会の折や

日本英文学会の折にお会いしたが、その特別の機会を得たのは、1985 年から1年間ケンブリッジ大学へ在外研究で行った時である。私は、その何年か前にレディング大学での英語研修プログラムに参加した時、ケンブリッジに行って、スターンの書誌学者の J.C.T. Oates 先生に会い、作家の一次資料の実際を教えてもらっていた。その先生との縁で私はダーウィン・カレッジのアソウシエット・メンバーとして家族とともに滞在した。

85年4月から86年3月までのケンブリッジでの1年間は、今でも記憶に鮮やかに残る特別な時期である。私はケンブリッジ大学図書館のスターンの一次資料を調べることを中心にしたが、やがて関連資料が他のカレッジ図書館にも存在することを知り、ジーザス・カレッジ、トリニティ・カレッジ、セント・ジョンズ・カレッジ、キングズ・カレッジなどの主だった図書館にも出入りした。18世紀の刊行本を直に手にする喜びは一入のものだった。学期のあいだはいくつかの講義を聴いたが、中でも印象的だったのはトニー・タナーの18世紀作家論であった。タナーは、車椅子の姿だった。そこにも長い物語があることを誰かから聞いた。

この時期多くの人との出会いがあった。オーツ先生はもちろんのこと、エマニュエル・カレッジのブルワー先生が特別にケンブリッジの日本人研究者のために作ったと聞いていた日本人会の人々、フィッツウイリアム・カレッジの付属牧師のジョン・マントル師、スターン研究者のジェフリー・デイ氏、F.R. リーヴィスの弟子であったというデニス・トンプソン氏、リーヴィスとクイーニー夫妻のことをゴシップがらみで話してくれた隣人のホワイト夫人、その他その他である。英文科の授業を聴いたのは、タナーのほか、ジリアン・ビア、ジャネット・トッド、クリストファー・リックスなどである。

こうした忙しい毎日だったが、時には旅行もした。そのひとつが、オックスフォード行きだった。そしてそのオックスフォードには玉井氏夫妻がおられたのである。たしか誰かの車に乗せてもらって、ケンブリッジから何時間かかかって氏を訪ねた。筑波大の荒木氏と福岡の村里氏と三人だったか、あ

るいはもう一人おられたか、今や定かではない。

その時の話の内容もとっくに忘れたが、ただ玉井夫人の静かなたたずまいが深く印象に残っている。氏は、チュートリアルの実際を体験しておられて大変そうであったが、それは日本人の留学生の姿として最もあるべき姿であったろう。玉井氏にとってオックスフォード留学は大きな意味を持っていたに違いないと想像する。

玉井夫妻が、その後ケンブリッジの私どもを訪問してくれたのは有難かった。しかし私どもがお二人に十分なおもてなしのお返しが出来なかったのは、今もって申し訳なかったと思う。

私が玉井氏に恩義を感じる最大のものは、私がスターン研究をまとめて『ローレンス・スターン論集』を出版した時、氏が私のために出版祝賀会を開いてくれたことである。祝賀会のための案内文、その送付、会場の設定、参加人数の確認その他のこまごまとした雑用をひとりでこなすという、このようなことは、まことに異例のご好意である。当日の祝賀会では司会の役も引き受けて下さって、お陰でつつがなく終わることができた。阪大英文科の中心として多忙の身でありながら、よく私ごとき者のために労をつくして下さったと思う。このことに対し、ここに紙面を借りて改めて厚くお礼申し上げたい。

玉井氏は、このたび阪大でのお勤めを終えられるという。そういう年回りであることは致し方ないことだが、日本英文学会関西支部長など学会のお仕事も多く残しておられる。今後ともご活躍とご健勝のほどを、大いなる感謝とともに祈りたい。

(関西大学教授)

なんだか夢のような

仙 葉 豊

玉井さんが定年だという。うそー、という気持ちになるのだが、やはりその事実に変わりはない。玉井さんと知り合ったのは、彼が文学部の助手で私が4年のときだったから、もう40年にもなるのだ。ちょっと信じられなくてほんとうに、うそー、とつぶやいてしまう。なんだかあっという間のことでまるで夢のようだ。

私は、当時あまり大学院に行く気にもならなくて、というより英語の勉強 をして、それで飯を食っていくというような考えにもなれずに、ぶらぶらし ていたときに、大学院に行くようにしむけてくれたのが玉井さんだった。あ る日、卒論を書くことになってふらっと研究室を訪れたら、私がデフォーを 卒論で扱うことを知っていた玉井さんが、TLSの最新号を手にして見せてく れて、こんな本が出ているよと教えてくれたのだった。デフォーについて書 かれた J. P. Hunter の Reluctant Pilgrim だった。当時の『ロビンソン・ク ルーソー』研究の最先端で、自分の書こうとしていたこととぴったり重なっ ていたので、図書館から借りて、特に一生懸命読んだ記憶がある。クルーソー の宗教的な側面を重視して、従来の経済人クルーソーという方向を一変した 研究書だった。これがきかっけで、卒論と修論を書いて、「クルーソー論」 を OLR に載せていただいたのである。だから、あまりやる気がなくて、そ してオイル・ショックという現在と同じような不況のさなか、どうしてこれ からの人生を送ろうかと悩んでいた私の方向を決めてくれたのだった。私の 人生の進路にこのような大きな影響をあたえてくれたのは、このように、ちょっ とした玉井さんの好意だったのである。以来、数限りなくお世話になって現 在に至っている。

私たちの卒業のときは、まだ学園紛争の余波が残っていて、というよりその真っただ中だったので、大学構内で卒論の口頭試問を行うことができずに、教授の村上至孝先生の京都のご自宅で行われたのであった。瀟洒ないかにも京都郊外の家という感じの村上先生のお宅に諮問に伺ったとき、控えの間だった応接間でいろいろ話しかけてくれて緊張を解いてくれたのも助手だった玉井さんだ。諮問のときになにをどう答えたのか記憶にないのだが、あがり症だった私の気持ちを落ち着けてくれてくれた、玉井さんの心遣いは忘れられない。それでなんとか卒業できたのではなかったか。なにせできの悪い学生だった私である。

4年をひとよりも1年余分にやって、それから大学院へ行ったのだったが、 井口堂の玉井さんの古ぼけた壁にひびが入っていた下宿にお邪魔したことも あった。なんだか健康な外見なのに世紀末のような不健康な本がたくさん本 棚に並んでいたので、どうも妙な気がしたのを覚えている。ただ、この頃の 記憶では、やはり和具の夏季合宿のことが忘れられない。文学の助手が玉井 さんで、語学のほうの助手は島田守さんだった。当時はけっこう語学の先輩 たちと石橋で飲み歩いてきた記憶があるのだが、長谷川存古さんや加藤主税 さんなど語学の方々とお近づきになれたのも、この夏の合宿だったような気 がする。亡くなられた林和仁さんもいた。みんなで出かけて行って小さな和 **具の島でわいわいやって、私が例によって一番酔っ払って、みんなの顰蹙を** 買った。酔ったまま逆立ちをして網戸を破ってしまい、大目玉をくらったり したのだ。村上先生が1度だけ来てくださったのが忘れられないのだが、ほ とんど毎回のように成田義光先生が、引率役を引き受けてくださって、楽し い夏のひと時を4年と大学院生とで持てたのであった。飲むのはもちろんだ が、卓球をしたり、トランプをしたり囲碁・将棋などもした。カレーとスイ カがうまかったことを覚えている。フランス文学の連中と一緒になったとき もあった。彼らは呑み助が多く、おかげで私の酔っ払いぶりが目立たなくなっ て助かったこともあった。玉井さんは、成田先生から小舟の船尾に立って一 本艪のこぎ方のコツを習って、われわれを釣りに連れて行ってくれたりしたのであった。小さなキスがたくさん釣れて、それを浜辺で焼いてみんなで類張ったのが昨日のように思える。釣り部だった川口能久さんが全然釣れないのをみんなでからかったりしていた。玉井さんはそのあと麦藁帽子をかぶって、合歓の里を横目で見ながら、平泳ぎで島を一周して回っていた。玉井さんは今でももちろんお元気だが、昔はもっと元気だったのだ。

そのあと私は防衛大学校に助手として就職したのだったが、ときどき玉井さんを中心とした5~6人の研究会に出席のために大阪に戻ってきていた。後に翻訳されて世に出るヒリス・ミラーの『小説と反復』などの理論書を読んでいた。場所は前の玉井さんのお宅が多かったような気がする。それから、玉井さんの和歌山の田舎のお宅にみんなでお邪魔したこともあった。ぼんやりとした記憶の霧の中で、大きな農家の入口の門が浮かび上がってくる。そこでもお酒をごちそうになって、何人かで雑魚寝をするということになったのだが、部屋のすぐそとにあった用水の池のようなところから、カエルの大きな鳴き声がして、酔っ払っているのになかなか寝付かれなかった記憶がある。何を話したのかということは、みんな忘れてしまったのだが、都会育ちの私には田舎に泊まったことがめずらしくて、やたらと大きいように感じたカエルの鳴き声だけが今でも耳元に残っている。どうも妙な記憶ではある。

このような若き日々を回想しているとほんとうに夢のような気がする。貧乏続きであまりいい青春を送れなかった私は、普段は若い頃に戻りたいなどとは決して思わないのではあるが、玉井さんと一緒に過ごした時間だけはかけがえのないものとして、時折、ふっと思い出すことがある。それだけお世話になっていたのだろう。玉井さんほんとうにありがとうございました。そしてお疲れさまでした。お互いにこれからも元気で頑張っていきましょう。

(関東学院大学教授)

玉 井 先 生

太田素子

私が、学士入学で阪大英文科に編入したのは、玉井さんが英文科助手に就任されたのと同じ年である。当時、英文学には村上先生、山川先生、英語学には毛利先生、成田先生がおられ、助手は玉井さんと島田さんであった。当時の先生方の3人が既に亡くなられ、又、玉井さん以外は全て阪大を去られ、そしてこのたび、玉井さんが阪大を去られることに、感無量の思いがある。

当時は70年安保闘争の終わりの頃、東大入試が中止になった年でもあった。英文科3回生は私が入って8人と比較的少なめであった。学士入学で入ったので、知った人が一人もおらず、学内で一言も喋らない日もあった当時、玉井さんは不慣れな私に控えめに、しかし行き届いたご指示をいただいたことをよくおぼえている。英文科の3回生4回生で、夏には、阪大の海の家がある、和具にも泊まりがけで行った。退官の3年前であった村上先生も行かれた。砂浜のない岩だらけの海で泳ぎ、ボートでなく和船の櫓をこいで(玉井さんは上手にこいでおられた。私は乗せてもらっただけ)釣りをし、釣った小魚を島田さんが三枚におろして海水で洗ったのに、舌鼓をうった。海の家は中央が板張りの広間で、卓球台があり、その周りに幾つかの仕切られた和室があって、そこで寝泊まりをした。和室には天井が張ってなかったので、部屋の仕切りをこえて頭上からピンポン球が落ちてきたり、網戸のある部屋とない部屋があり、蚊に悩まされたのも今は楽しい思い出である。

大学院に進んだ時、英文科の先輩に、授業では決して泣くなと言われた。 泣くとその後は誰も真剣に批評をしてくれない、お客さん扱いになるから、 と言われて、何も知らない私は少し脅えた。しかし、村上先生、山川先生、 玉井さんは、間違ったりあやふやだった場合には、必ずきちんと指摘はして くださるが、きわめて温厚、穏やかにであったので、私は泣くことはなかった。私の大学院時代は、先輩も穏やかな人が多かったと思う。しかし、OEDをひくのをやや怠った時には必ず、ここは OED に引用がありましたと指摘を受け、次回は指摘されないよう頑張るぞと闘志をかきたてられたものだった。口調は穏やかだが、間違いは必ず指摘され、曖昧な部分には間接的助言があり、後は本人に考えさせる、これが当時の阪大の先生方や先輩方であったと思う。

村上先生が退官して阪大を去られ、玉井さんも大阪府立大学に行かれて、 代わりに蘭村さんが助手になられた。藤井先生が英文科に着任され教えを受けた。玉井さんには、授業で教えを受ける機会はなく、助手としていろいろ お世話になったまま、やがて、学会などでお目にかかるくらいになってしまった。その間、学生時代そのままに、先生をつけず玉井さんと長年呼ばせていただいていた。

そして、このたび、玉井先生にご指導いただく機会に恵まれた。昨年秋の阪大英文学会でお目にかかった折に、玉井先生が阪大におられる間に提出したかった論文について、子育てと親の介護に追われて間に合わなかったことと、けれどいつかは仕上げたいということを、玉井先生に申し上げた。その時、先生は、「今やってみてはどうですか、これまでずっと書いてきた論文もあるだろうし」と言って下さった。思いもしなかった励ましに、私は驚き、そして、自分の中にその可能性を探ってみた。出来るかどうか分からないが頑張ってみたい自分がいた。あのときチャンスを下さり、絶妙のタイミングで背中を押してくださった先生に感謝している。それからも、ご多忙をきわめる玉井先生は、私の書いたものを読んで、的確なアドヴァイスを下さった。私は、先生のご指導についていくべく、必死になった。こうしろああしろと細かく指摘するのではなく、しかし先生の鋭いご指摘で、私は今回、自分の研究を少しパースペクティヴに見直せるようになったのではと思う。6月に、新型インフルエンザで大学は休講となり、その代わりの補講で、1週間開始

の遅れた夏休みには、夜明けの空が白むまで私はパソコンを打った。もたつきながら、自分の表現力のなさを嘆きつつ、しかし、久しぶりに論文に全力投球出来る自分を感じ、やりたいことはこれだという手応えを感じることで、前に進むことが出来た。玉井先生は、私の文章を出来るだけ生かしつつ、もたもたしているところは方向性を示して下さった。今回の論文指導では、先生の穏やかだが鋭く的確なご指摘が、私の目を開かせてくれた。

あの時、先生に背中を押していただかなかったら、論文は提出にこぎつけられなかっただろう。機会を与えていただいたことに、そして、その後のご指導で得られたものに、大変感謝している。今この原稿を書いている時点では論文の結果は出ていないが、よい結果となることを願いながらも、それとは別にこの一年の充実感と、玉井先生のご指導から得たものは、何物にも代え難い経験であったと思っている。

私は、誰にでも簡単に先生をつけて呼ぶよりも、同僚や先輩は、○○さんの方が呼び方としては好ましく思っている。しかし、自分の学問の師は恐れ多くて、村上さん、藤井さんとは呼べない。助手として長らく玉井さんと呼ばせていただいた私だが、今、心から、玉井先生と呼べるのは、そういう先生と出会えたのは、大変幸せなことだと、今あらためてありがたく思うこの頃である。

(大手前大学教授)

玉井 暲 先生の思い出

川口能久

玉井先生が停年を迎えられることになった。月並みだが、月日の経つのは 速いものだとつくづく思う。同時にやはり寂しく、残念だという気持ちを禁 じえない。

わたしと玉井先生の関係は、わたしが大阪大学に入学した 1971 年 4 月にさかのぼる。そのとき玉井先生は文学部の助手をしておられた。玉井先生は1974 年 6 月に大阪府立大学に転出されているので、大阪大学におけるお付き合いは3 年余りに過ぎない。言うまでもなく、玉井先生の授業に出席したこともない。また、当時は教養部と学部がかなり厳密に分かれていた。これだけ書けば、随分希薄な関係のように見えるが、玉井先生には目を掛けていただき、いろいろなことを教えていただいた。阪急東通り商店街(?)のあまり高級とは言えない酒場のようなところに連れていってもらったことを覚えている。

玉井先生が大阪府立大学に転出されたときにいただいた葉書には、万年筆で「いく末の決心はつきましたか。期待していますからね」と書かれていた。わたしが4回生のときである。わたしは決して優秀な、模範的な学生であったわけではないが、このような言葉をかけていただいたこともあって、大学院に進学することを決めたように思う。今から思えば、まことにありがたいことであった。

玉井先生と言えば、やはり和具について書かなければならない。あの頃 (現在でもそうかもしれないが)、夏休みに英文科で和具に行くことになって いた。2泊3日だったと思う。わたしは多分10回くらい玉井先生と和具に 行っているはずである。世間と隔絶したあの島でいろいろなことを教えてい

ただいた。授業よりも有意義ではないかと思われるほどである。水泳をしたり、釣りをしたり、花火をしたり、いろいろな話をしたりした。特筆すべきことは、玉井先生が伝馬船の漕ぎ方をマスターされたことである。師匠は成田義光先生である。わたしもやってみたが、うまくいかなかった。結局、伝馬船の漕ぎ方をマスターしたのは玉井先生だけだったのではないかと思う。伝馬船で島を一周したりした。懐かしく、楽しい思い出である。

玉井先生とともに山川鴻三先生と藤井治彦先生の記念論文集の編集に携わったことも懐かしい思い出である。わたしは文字通りの雑用を少しお手伝いしたに過ぎないが、玉井先生は編集長として、出版社との交渉、ニューズ・レターの作成等々、多方面にわたって大活躍された。わたしなら気が短いので締切が過ぎるとすぐに見切り発車してしまうところだが、玉井先生は、締切をあまり気にせず(?)、実に粘り強く説得し、結局、あきらめていた人にも原稿を書かせるのである。編集長とはこうでなければならないと思ったものである。

阪大英文学会と阪大叢書にも触れておきたい。わたしが助手をしていた頃の阪大英文学会はかなりおおらかな学会であったように思う。現在のような会則もなければ、会長はともかく、幹事、運営委員、会計監査、顧問といった役員もとくに決まっていなかったように思う。直接の当事者ではないので詳しいことは分からないが、玉井先生は阪大英文学会を現在のような形に整備するにあたって、英文科のスタッフとともに大いに尽力されたのではないかと思う。

阪大叢書についても同様である。わたしは投稿したことがないので1号のときから申し訳なく思っているのだが、内容、体裁とも立派な叢書である。 大学の英文学会でこのような叢書を継続的に出版しているところはないのではないかと思う。玉井先生をはじめ関係者の方々の尽力の賜物である。

玉井先生はさまざまな学会でも活躍された。たとえば、非常に難しいと思 われる時期に日本英文学会の理事をつとめられた。多分そのためだと思われ るが、日本英文学会関西支部の設立や『関西英文学研究』の創刊にも尽力され、支部長をつとめられている。わたしは本当に形だけだが、日本英文学会の大学代表ということになっており、また関西支部の設立にかかわる会議には出席しているので、少しは事情を知っているつもりだが、玉井先生はきわめて困難な仕事をこなされた。

思えば 40 年近くまえから玉井先生を存じあげているが、不思議なことに、いつまでも若々しく、あまり年をとられていないように思われる。また、この間、研究を励ましていただいたり、いろいろな意味でお世話になった。感謝するとともにこれからもご指導いただければと願っている。

最近の大学は激変している。私立大学も大変(無茶苦茶?)だが、国立、公立大学法人も、それはそれで非常に厳しいようである。いわゆる英文科に対する風当たりは激しく、落ち込むようなことばかりで、景気のいい話をほとんど聞かない。冒頭で述べたように、退職されることは寂しく、残念なことではあるが、それはいろいろなことから解放されることでもある。これからは自由に、いつまでも若々しく、人生を楽しんでいただきたい。

(立命館大学教授)

玉 井 暲 学 兄

米 本 弘 一

「学兄」という言葉は、国語辞典によると「学問上の先輩・友人に対する敬称」である。私にとって玉井さんはまさに「学問上の先輩」であり、私生活では何でも相談できる友人と言うか兄のような存在であるので、「学兄」と呼ぶにふさわしい人である。

私が初めて玉井さんとお会いしたのは、学部の三年生として英文科に進学

した時のことで、当時玉井さんは英文科の助手をしておられた。しかし、本人にお会いする前から私は玉井さんのことをよく知っていた。仏文科に行った同学年の友人が玉井さんと同じ下宿に住んでおり、その友人から玉井さんのことをしばしば聞かされていたからである。その頃はワンルームマンションなどといったしゃれたものはなく、地方出身の学生は、たいてい石橋周辺の下宿屋かアパートに住んでいた。玉井さんも学生の時からの延長でその下宿屋で暮らしていたのである。下宿生同士の関係は今よりも濃密で、よく一緒に酒を飲みながら議論をしたり、時には大騒ぎをしたりしていた。そこで、玉井さんもその友人の話に出てくる私たちのことをよく知っていた。私たちと言うのは、その年に英文科に入った男子学生三人のことで、その男は私たちを英文科の「三羽ガラス」あるいは「三バカ大将」と呼んで、いろいろと下井さんに吹聴していたそうである。

さて、四月になって英文科の助手室を、今は名古屋大学で教えている同級生の男と二人で訪ねて行ったところ、中からは女性たちの話し声や笑い声が聞こえてきて、何やら楽しげな気配である。開いていたドアの隙間からのぞいて見ると、一学年上のお姉様方数人が玉井さんと談笑していた。聞くとはなしに立ち聞きしていると、女性の一人が鉛筆削りはないかと尋ね、玉井さんが、そんなものはないからナイフで削ってあげようと言い、みずから鉛筆を削り始めたようである。女性たちは「ナイフでそんなにきれいに削れるの。わー、すごい!」などと感嘆の声を上げている。ナイフで鉛筆も削れないお嬢様も困るが、何とも気さくで面倒見の良い人だなというのが、私が玉井さんに対して抱いた第一印象であった。そのうちドアの陰に隠れている私たちに気付いた玉井さんは、「おー、入れ、入れ」と言い、「君らのことはよく知っている」と言って下さった。

玉井さんは私たち二人が大学院進学を考えていることを知っていたので、 文学研究の方法や論文の書き方などについて書かれた入門書を一緒に読んで、 英文学研究の手ほどきをしてくれることになった。しかし、二ヶ月もたたな いうちに玉井さんは大阪府立大学に就職が決まり、助手を辞めることになったが、次の助手となる人に私たちの指導を託して行かれた。府立大に移ってからも玉井さんはしばらくの間石橋に住んでおられたので、お会いする機会には事欠かなかった。

その後、玉井さんは結婚して堺に居を移されたが、例の仏文科の友人と私は何度かお宅に招かれ、奥様の心尽くしの手料理をごちそうになった。今考えてみると、これは、普段ろくなものを食べていない貧乏学生に少しでも栄養を付けさせてやろうという配慮からであったようである。それ以外にも、石橋や梅田などの飲み屋によく連れていってもらい、様々なことを教えていただき、いろいろと相談に乗ってもらった。そんな時いつも、玉井さんは気さくな態度で私たちに接して下さった。

そして、私が大学に就職してからしばらくして、結婚しようかどうか迷っていた時も、玉井さんに相談した。玉井さんは「いろいろ考えても仕方ないから、早く身を固めた方がいい」と言って結婚を勧めて下さったのであるが、その後の話の流れから、私は事もあろうに玉井さんに披露宴の司会をお願いしてしまったのである。これはよく考えてみると(と言うか、よく考えなくても)大変失礼な話であり、本来ならば玉井さんは賓客として招待すべきであり、司会は友人か後輩に頼むべきであった。しかし、玉井さんは即座にホイホイと引き受けて下さった。披露宴の最初に玉井さんが「新郎とは先輩・後輩の間柄でありまして」と自己紹介をされたあと、藤井先生がスピーチに立たれ、「先ほど玉井君が先輩・後輩と言いましたが、米本君の方が後輩なのでありますので、お間違えなきように」と、やんわりと皮肉を言われた時、これはやはりまずかったと冷や汗が出たのを今でも覚えている。何となく言いそびれて、これまで失礼をお詫びする機会がなかったので、この場を借りてお詫び申し上げます。

玉井さんにお願いすれば、たいていのことは何とかなりそうだと思っているのは私だけではあるまい。玉井さんが英文科のスタッフとして阪大に戻ら

れてからもこの関係は続き、私は公私に渡りお世話になるばかりであった。 用事で文学部を訪れる度に、玉井さんは初めてお会いした時と同じ、にこや かな笑顔と気さくな態度で迎えて下さる。そんな時いつも私は、玉井さんが 今でも英文科の助手で自分が学生だという錯覚に陥ってしまう。したがって、 玉井さんが定年を迎えて阪大を去る日が来ようとは、思いもよらないことで あった。しかし、実際には、あれから三十数年の歳月が過ぎ去ったのであり、 当然ながら、玉井さんも私もそれだけ歳をとってしまったのである。それで もなお、先輩・後輩の間柄は変わることはなく、玉井さんはいつまでも私に とって「学兄」である。これからもよろしくお願いします。

(神戸大学教授)

誠意の人

村 井 和 彦

私事から始めるのをお許しいただきたい。玉井暲先生と私は八才しか違わない。「八才しか」と言うのは、八年後の私が現在の玉井先生の業績に質、量ともに追いつくのは不可能に近いのではないかという絶望と、子どものころ肝油を飲まされた経験を話したとき、先生が「われわれは同世代だ」と言ってくださった好意に甘える気持ちとが入り混じった感情からである。したがって、以下の駄文の失礼もついでにお許し願いたい。

私が大阪大学大学院の修士課程英文学専攻に入学したのは1979年(昭和54年)であった。翌年、英語学の毛利可信先生が退官された。さらに次の年には山川鴻三先生が退官され、一時的に、英文学では藤井治彦先生、英語学では成田義光先生がそれぞれ助教授として孤軍奮闘しなければならない時期があったのである。口さがない院生たちは、「大空位時代」などと称し、

助手も巻き込んで、次に誰が来るかを噂しあったものだ。ちなみに私が当時 お世話になった助手の方々は、川口能久氏(現立命館大学教授)、森岡裕一 氏(現大阪大学教授)、白川計子氏(現神戸松蔭女子学院大学教授)であり、 院生の先輩には米本弘一氏(現神戸大学教授)、田口哲也氏(現同志社大学 教授)、宮川清司氏(大阪大学名誉教授、現大谷大学教授)、後輩には新野緑 氏 (現神戸市外国語大学教授)、服部典之氏 (現大阪大学教授)、渡辺克昭氏 (現大阪大学教授) らがいた。錚々たるものである。二年の内に、成田先生、 藤井先生が教授に昇進され、河上誓作先生が英語学の助教授として赴任され た。いよいよ残るは英文学の助教授のみとなったのである。誰が言い出した か分からない。ここで名前を出した方々でないことは確かである。「次の助 教授が誰になるか、トトカルチョをやろう」などという声が上がった。不謹 慎極まりない。ひょっとしたら私だったか。しかし、誰かがかつて助手を勤 められた「玉井さん」の名を出すと、一瞬の静寂の後、不謹慎な雰囲気は一 蹴された。その名前があまりにも現実的だったからである。玉井先生はその ころすでに和歌山大学で教鞭をとっておられた。したがって私の年代では学 生として机を並べる栄誉には浴さなかったが、大学院に残っていた先輩方か ら「玉井さん」の名前が、そこはかとない敬意とともに、口に上るのを何度 も聞かされていたのである。私が始めて玉井先生の顔を知ったのは、山川鴻 三先生の退官記念論文集出版記念祝賀会であったと思う。玉井先生の気配り の行き届いた司会ぶりに感銘を受け、「これがあの玉井先輩か」と思ったこ とをよく覚えている。それ以後、学会の後の酒席や和具の合宿旅行などでた びたびご一緒する機会があった。書生気分の抜けない私は、先生と諸先輩方 の会話に大人の付き合い方を学んだ。

1983 年、大方の院生たちの予想通り、玉井暲先生は英文学講座の助教授として赴任された。念のために書き添えるが、トトカルチョは成立しなかった。私は博士後期課程の三年目を迎えていた。それまで「さん付け」で呼んでいた私だが、「これからは先生と呼ばせていただきます」と宣言した。オ

リヴァー・ゴールドスミスの演習に参加したと思う。弟子を名乗るのはおこがましいが、たった半年間だったけれども、先生が阪大において教えた最初の学生のひとりという名誉は私のものである。

ここまで書いて私は玉井先生が十月赴任だったと思い込んでいたのだが、 それが間違いではないかと気がついた。アルバイトや自堕落な生活に明け暮れていた私はほとんど大学に行かなかった。せっかくの演習も途中で挫折したのではなかったか。私の参加した演習はシェリダンだったかもしれない。 ,半年というのは、自分に都合のよいように記憶を修正していたのではないか。 本当に恥ずかしい。

そんな私ではあったが、1984年、助手として拾っていただいた。そのこ ろ主任教授の藤井先生は、スペンサーに関する論文を構想されていた。この 論文は「The Faerie Queene における構造の形成/隠蔽」として『英語青年』 (1990年3月号)に掲載され、後に、『イギリス・ルネサンス詩研究』(藤井 治彦著、英宝社、1996年)に収められることになる。そんなある日、突然、 藤井先牛が私に、「『妖精の女干』に登場する人物には同伴者がいることに気 づいたんだが、村井君どう思う?」と尋ねられた。答えに詰まっていると、 「同じことを玉井君に聞いたらな、間髪を入れず『ドン・キホーテ』と言っ たぞ、さすがやな | と続けられた。弥次喜多道中を思い浮かべていた私は沈 黙せざるを得なかった。私の助手生活の二年目に、玉井先生はオックスフォー ドへ在外研究に出かけられた。阪神タイガースが二十一年ぶりの優勝を遂げ た年である。当時はインターネットなどなかった時代である(あったかもし れないが、文系の人間は誰も利用しなかった)。優勝翌日、阪急石橋駅の売 店であるだけのスポーツ新聞を買い込んだ私は、イギリスの先生へ送り届け た。二年間の助手生活で私が成し遂げた最大の仕事である。余計なことだか、 次にタイガースが優勝したのは、ずっと後に私が在外研究に行っていた年で ある。「阪神優勝のためには、われわれは日本にいないほうがよいのではな いか」と後に語り合った。

1986年、私は高知大学に職を得た。地方に引っ込んでしまった私は玉井 先生と直接お会いする機会も少なくなった。先生が編纂された英語の教科書、 スーザン・ソンタグの『病いとそのメタファー』(英宝社)を教養課程の学 生に教えるのが細々とした繋がりであった。ある年、「大学改革」の一環と して一年生の必修科目に新設した「日本語技法」なるものを教えろというこ とになった。近頃の学生は読み書きもろくにできないからきちんとした日本 語を教えろというのだ。理系の発想である。人文系の学生にスズメの学校を やるのも馬鹿らしいので、一計を案じて、「論文の書き方」を講義してみよ うと思いついた。しかし、考えてみれば「論文の書き方を教える」とは傲慢 な話である。こういうときは、権威に頼るに限る。ご本人には無断で玉井先 生の論文「絵画空間のなかの音楽 ―『ジョルジョーネ派論』再考 ― | (日本 ペイター協会編『ウォルター・ペイターの世界』所収、八潮出版社、1995 年)を学生に配り、論理展開、引用の仕方、そして文体の見本として使いな がら、解説を加えることでお茶を濁したのだった。最新の理論を薬籠中の物 としながら、決まり文句を羅列することなく、平明に語る先生の文体は私の 理想である。高知大学在任中、玉井先生に集中講義に来ていただいたことも あった。あいにく台風が直撃し、異例の休講となった。これ幸いと私は先生 を誘い、開いているレストランを探し出して半日語り合う機会を得た。何を 話したかはよく覚えていない。私が一方的にしゃべっただけだったかもしれ ない。覚えているのは、外の暴風雨を忘れるほど夢中になって語り合えた時 間の幸福感である。

現在の勤務地に転任してからも、もう一度玉井先生には集中講義に来ていただいた。学生主催のささやかな歓迎会を開いたが、先生は持参のカメラで写真を撮り、学生の人数分を焼き増しして送ってくださった。先生ならではの気配りであろう。定年を指折り数える年になって、「この人の知己を得てよかった」と思える人物は少ない。玉井先生は、その貴重なひとりである。まさかとは思うが万一、私の人格を褒めてくれる人がいるならば、それは玉

井先生の真似をしているだけである。直接、間接を問わず、先生によって私は何度救われたか分からないのだ。したがって、私は先生に足を向けて寝られない。他の恩人にも失礼のないよう、現在福岡在住の私は北に足を向けて寝ている。

今年の五月、日本英文学会の後で久しぶりに先生と酒席をともにすることができた。その席にはふたりの先輩も同席していた。そのうち、酒癖の悪い方の先輩が、「お前、玉井先生はどんな人だと思う?」とからみだした。ご本人を前にして、口ごもっていると、その先輩は「いいか、玉井先生はな、玉井先生はな、誠意の人なんだよ!」と振り絞るように言った。先輩は涙ぐんでいたと思う。

(九州大学教授)